



AK11035 金子 将也

# 住宅空間の領域の変化に関する研究

## — 沖縄県宮古島市池間島を事例として —

### Keywords

儀礼 居住空間 民俗方位  
宗教観 空間領域

### 1. はじめに

#### 1.1 研究背景

我々が住む地域社会には様々な儀礼や信仰が存在している。冠婚葬祭などがその主な例である。そのなかで建築と儀礼が深く関わっている場所も存在する。近年このような儀礼や信仰が衰退しているとも言われている。そのなかで、池間島には琉球王国時代からの儀礼が今でも色濃く残っている。そこで、儀礼や信仰が普通の島民の生活にどのように影響しているか、またどのように住宅の間取り、空間の領域に反映されているかということに関心を持ち、研究を行うことになった。また、人が居住する空間には宗教、儀礼により様々な意味が存在している。例えば日本では外から帰ってきて玄関で靴を脱ぐ。その靴を脱ぐという行為により外部と内部の境界を意識している。そのように人が生活する居住空間には可視化できない領域が存在する。本論では、沖縄県宮古島市池間島を事例として住宅の空間領域の構成の変化を儀礼や寝る場所、食事空間、接客空間などの居住者の行為、モノなどに着目して研究する。

#### 1.2 研究目的

本研究では儀礼が重要な分析対象となる。古くから色濃く残っている儀礼が普通の島民の生活にどのように影響しているか、住宅の間取り、空間の領域にどのように反映されているかなどを実測調査、聞き取り調査、文献により解き明かしていく。この論文の目的は、住宅の空間領域の変化を池間島を事例として明らかにすることである。また池間島は漁村地域である。現在は衰退しているが、かつてはカツオの遠洋漁業が盛んだった。書籍や論文にある古いデータを利用し、なおかつ現地調査により現状を把握する。さらに、日常／非日常の変化、モノ、居住者の行為に着目する。とくに、儀礼による日常、非日常の変化は住宅内の領域を変える条件となると考えられる。この三つに着目する理由は、建物だけでなく、その中で暮らす人びとの行為により住宅内の領域があらわれると考えられるからである。長年暮らしていく中でモノや行為により建築が自分のものに変化していく。また、これらの分析から、住宅における空間領域がどのように存在するか、あるいはどれほど変化するかを明らかに

する。

#### 1.3 研究方法

本研究は2014年7月31日から8月11日の日程で池間島で行ったフィールドワークに基づく。

フィールドワークの内容は、住宅内の実測・スケッチ・集落全体の実測・スケッチ、聞き取り調査である。

聞き取り調査は、インタビューシートを利用した。質問内容は、一日の生活様式、住居形式の変化、儀礼、空間の使い方などである。

実測軒数は、インタビューシートが37軒、住宅の実測が36軒である。この他に、前里ムトゥの建物の実測、池間島の儀礼について詳しいI氏にインタビューした。

### 2. 調査地の概要

#### 2.1 宮古島の概要

宮古群島は沖縄本島から南西に300km、東京から約2000km、北緯24～25度、東経125～126度に位置し、大小6つの島（宮古島、池間島、来間島、伊良部島、下地島、大神島）で構成されている。宮古島市の総面積は204平方km、人口約55,000人で、人口の大部分は平良地区に集中している。

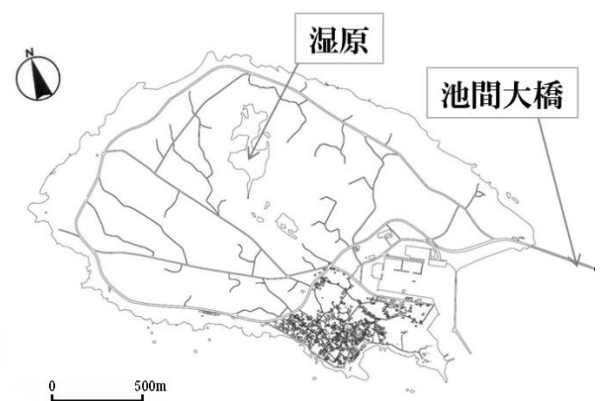


図1 沖縄県宮古島市池間島

#### 2.2 池間島の概要

池間島は、宮古島から北西約16kmにあり、池間大橋（1992年開通）でつながっており、市街地からは車で30分ほどの距離にある。周囲9km、車で15分もあれば1周できる小さな島である。世帯数は360世帯、人口は670人である。

島の中央部には「イーヌブー」と呼ばれる池間湿原が広がっており、水鳥や湿地帯植物の宝庫となっている。島の北東5~15kmには日本では最大級の大規模なサンゴ礁群「八重干瀬（やびじ）」が広がっており、豊かな漁場として、また、釣りやダイビング、シュノーケリングのポイントとして親しまれている。

池間島は、かつてカツオ漁で栄えた海洋民族の島である。そして、「ヒャーリクズ」や「ミャークツツ」といった祭や、オハルズ御嶽をはじめとする多くの聖域と、祭祀を護り続ける心の文化を大切にしている島である。

### 3. 池間島の住宅

#### 3.1 住宅の間取り

三室型の場合、表の室は右、左に一番座、二番座と間仕切りされるが、裏の座は一番裏座、二番裏座と間仕切りされないで、裏座一室である。

一番座、二番座、三番座という室の呼び方は標準語的な呼称であって、実際には地方によってそれぞれ異なっている。池間島では一番座をクジャシキ、二番座をナカユカ、三座をサンバンジャーと呼ぶ。また、一番裏座をウツバラ、二番裏座をウツバラ/ジュ/ズーユと呼ぶ。一番座に年寄り夫婦、二番座は子どもたち、裏座に若い夫婦と幼児が休む。三番座があり、三番裏座が漬物などの物置となる。通常人が訪ねてくると、まず二番座におし、遠来の客、改まった客は一番座にあげ、一番座に宿泊させる。隣人、親戚、友人などの気の張らない客は二番座で雑談し、宿泊もこの部屋にさせることがある。二番座は食事の部屋でもある。ただし炊事家で食事をするところでは主屋の二番座では食事をしない。三番座のある家では三番座が食事の部屋となるが、三番座が廊下風で狭い場合は穀類などの物置とし、二番座で食事をとることもある。結婚式、新築祝い、葬式、その他部落、親戚の人たちが祝事、慶事、弔事、祭りなどで大勢集まるときには一番座と二番座が同時に利用され、一番座は上座とされて男たちが座り、二番座は下座で女たちが座る。結婚式のとき、嫁は一番裏座にひかえているもので、その後、若夫婦の寝室となる。

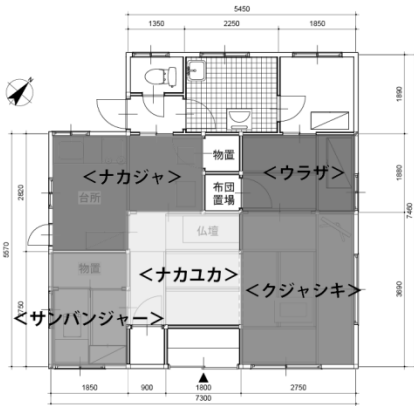


図2 S氏邸の部屋の構成

池間島でも一番座がもっとも重要であり、次に二番座、三番座、裏座となっている。間仕切りされないのが、池間島の住宅に廊下はほとんどみられない。

調査対象とした住宅の間取りは伝統的なものが多かった。しかし、居住者は「一番裏座」、「二番裏座」という言い方はせず、「ウラザ」または「シグイ」と呼んでいた。一番座は玄関から入って右端の東に最も多く配置されていた。

### 3.2 住宅内における宗教的要素と空間の関係

#### 3.2.1 池間島の民俗方位

池間島では、東の方位は東と南東を包括する。東は池間方言ではアガイ、アガラ、アガリとも呼ばれる。池間島の民俗方位は、自然方位から時計回りに45度ずれている。また、東西南北を指す方位の方言名称が池間島だけ他の所と違っていて特有のものである。図3の〈〉内が民俗方位上の東西南北である。

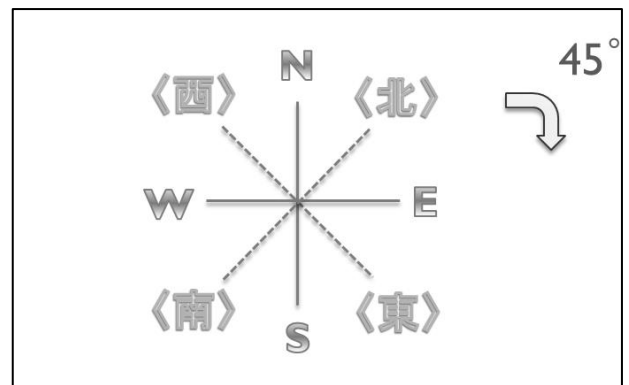
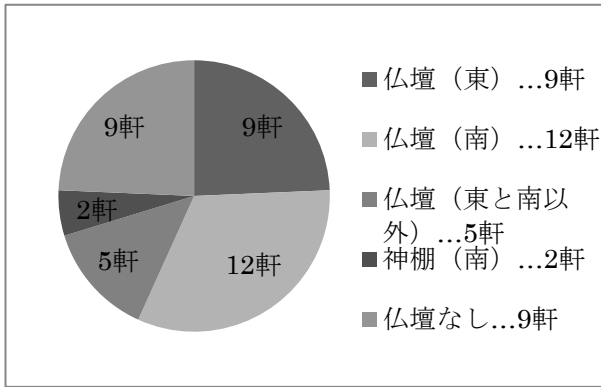


図3 民俗方位

#### 3.2.2 仏壇

西方浄土とは仏教における聖域・理想の世界のことである。十億万仏土先の西方にあり、阿弥陀如来がいるとされる浄土のことである。別名、極楽浄土と言われる。宗派によって呼び方や概念は異なる。池間島では、仏壇の位置は東向きがもっともよいとされているが、この方位学はマウカンと呼ばれる先祖神や死者の靈魂を拝む方位の西向き（西方浄土）にも関与すると考えられる。東向きのつぎは南がよいとされている。

実測調査した36軒とインタビューのみを行った1軒を合わせた37軒の住宅のうち、仏壇が置いてある家が26軒あった。仏壇が住宅内に置いていない住宅が11軒あり、その中では、沖縄などの実家に置いてあるので池間の住宅に置いてない家や、親が亡くなったら仏壇を置くという家があった。また、グラフをみると仏壇が南向きに置いてある住宅のほうが多いことがわかる。南向きが多い理由としては、東西南北を指す方位の方言名称が池間島だけほかの所と違っていて特有のものとなっている（アガイは池間島で「東」を指すが、一部では「南」と言う。）ことが関係していると考えられる。



グラフ1 仏壇の向き

また、仏壇がある住宅26軒中21軒が二番座に仏壇が置いてあった。二番座の中の玄関から上がってすぐのところに仏壇が置いてある。それは玄関を開けたままで、誰でも拝むことができるようにするためである。また、仏壇や神棚や墓も北向きは避ける傾向がある。仏壇への祈願の仕方は、果物、豚とごぼうとこんにゃくの煮物、さとうきび、刺身、らくがん、白い餅などを供え、願いごとを唱える、というものである。



写真1 S氏邸の仏壇

### 3.2.3 神棚

神棚はマウガンと呼ばれる住宅の守り神で、住宅の東の端に置く。ユタと呼ばれる預言者にマウガンを住宅のどこに置くべきか教えてもらう。ユタから神棚を置く場所を伝えてもらえない人は神棚を置くことができない。神棚が置かれている住宅は5軒あった。祈願の仕方は毎月1日とお祝いの日には米、塩、菓子を供えるなどの他に、毎日茶を供えている事例もあった。ただ、仏壇と神棚を同じとみなしている住宅も1軒あり、仏壇と神棚の区別が曖昧な部分もあった。

### 3.2.4 火の神（ヒヌカン）

ヒヌカンとはカマドの火の神様である。古くから火は文明の礎であり、それを脈々と受け継いできた沖縄の民間信仰が火の神（ヒヌカン）である。ヒヌカンを祀る場所は台所で、代々女性によって祈願が行われており、決して他人が拝むことはできないとされている。また、昔のカマドは三つの石を利用していたところから、ヒヌカ

ンを表す言葉としてウミチムン（御三物）やウカマなどと呼ばれている。ヒヌカンに家族の健康や安全祈願、厄払いの祈願や吉事の報告を行う。また「お通し」と呼ばれる祈願や、墓や仏壇が遠く離れている人はヒヌカンを通して先祖に拝むことができる。ヒヌカンの場所はコンロの近くの東や西向きが良いとされている。先祖（仏壇）は主屋でまつり、火の神は炊事家でまつっているが、先祖を先に拝み、次に火の神を拝むところと、その逆のところがある。いずれにしても先祖神と火の神は屋内神として大切な神となっている。

インタビューによると、火の神があるという住居は10軒あった。祈願の仕方は、朝と晩に手を合わせるというものがあった。火の神が置いてある部屋は、全てナカジヤと呼ばれる台所であった。

## 3.3 住宅内における儀礼

### 3.3.1 結婚

池間島における結婚は妻を探すという意味のトゥズトゥミと言う。嫁の両親または家族に一升瓶とタンナフルと呼ばれる丸いお菓子を送る。夫をめとるという意味のブットムツという言葉もある。現在は式場で結婚式を行うのが一般的になっており、住宅内で行う結婚儀礼は行われていない。

### 3.3.2 葬式

池間島における葬式については、棺桶を自分たちで作成し、釜におさめて石でふさぐ自然葬が行われていた。火葬の場合の遺灰はだいたい一番座に置かれる。家によっては二番座に遺灰を置く。妻が亡くなったら夫が喪主となる。土葬の場合は頭を西、足を東とする。

### 3.3.3 出産

池間島における出産は、二番座で行われる。親戚の女性たちが依頼され、季節に関係なく十日間火をたいて妊婦の体を温める。

## 3.4 住宅内の分析

36軒の実測とインタビューを行った住宅について、使い方やモノについて分析する。池間島の白地図に調査対象住宅にNo.1からNo.36までの番号を振り分けた。次に間取りの分類を行った。分類方法は、部屋の名前と使い方による。得られたデータを、共通する部屋（一番座、二番座、台所、浴室、トイレ、納戸）ごとに分類した。

ここでは接客空間を、インタビューを行う際に筆者らが招かれた部屋とする。接客空間は二番座が最も多く、15軒あった。一番座は13軒あった。

すでに述べた接客方法にならえば、〈接客空間での一番座は遠来の客、改まった客で、通常人が訪ねてくるとまず二番座に通す。隣人、親戚、友人などの気の張らない客は二番座で雑談する〉とされている。筆者らは遠来の客、改まった客に分類されるため、一番座に招かれるはずである。しかし実際には、一番座と二番座に二分す

る結果になった。

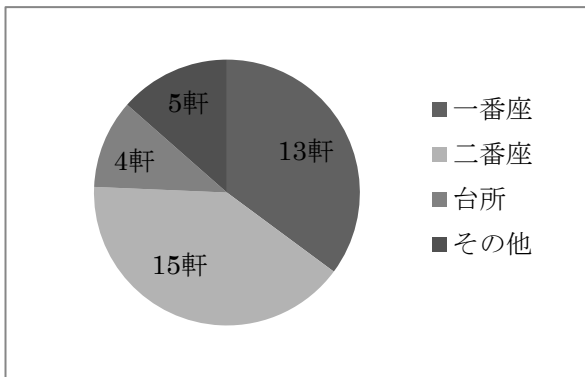


図2 接客空間の部屋の種類

二番座はくつろぎの空間となっており、テレビが置いてある住宅が多くあった。一番座にソファ、二番座にテレビが置かれ、二つの空間をまたいで使用している住宅もあった。さらに食事でも二番座で行う人も多数いた。

インタビュー対象者は75歳以上の高齢者が多く、住宅内の二番座と台所を主な生活スペースとしており、それ以外の部屋はあまり使用しておらず、物置となっている住宅もある。調査対象の37軒中二階建ての住宅が9軒あり、その中で二階部分を物置として使用している住宅もあった。高齢化や家族構成の変化とともに、住宅内の生活空間はコンパクトになっていくと考えられる。

寝る部屋は一番座、二番座、三番座とそれぞれ分散しており、傾向はみられなかった。寝る部屋を選んだ理由は風向きなどがあつた。寝る向きは頭を北に向けるのを避け、南または西を向いて寝る傾向があつた。

■一番座 ■二番座 ■台所 ■浴室 ■トイレ ■納戸  
↑仏壇/神棚の位置と向き ↓火の神の位置 ↓就寝時の頭の向き ○接客空間

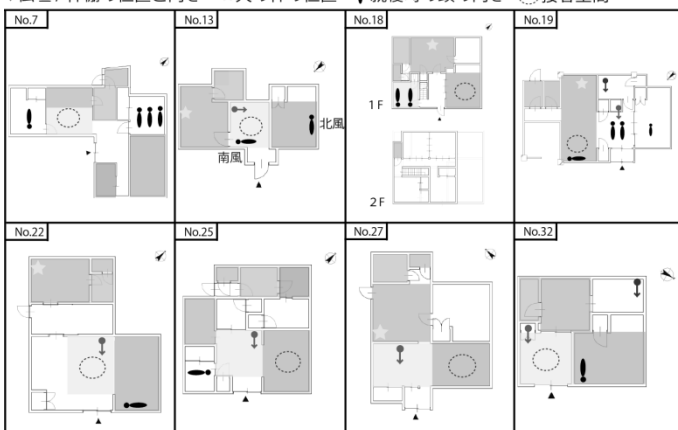


図4 調査対象住宅の使い方とモノによる類型

#### 4. 考察

池間島では、儀礼によって使用する空間が異なっている。とくに、東の方角にある一番座が最も重要とされている。東は太陽の昇る方角であり、魂の源と考えられているためである。住宅内における宗教儀礼は高齢化にともない現在は衰退しているが、間取りとしては残っている。かつての住宅のような、明確な領域は現在変化しており、それは現在の住宅における行為がどの部屋で行わ

れるかをみることで明らかになる。

表1 部屋の使い方の変化

接客	一番座→一番座+二番座
就寝	裏座→一番座+二番座+三番座

一方、住宅空間に漁村地域という要素はほとんど見受けられなかった。現在は漁業が廃れている事と、1959年のサラ台風（宮古島台風）により古い住宅は多く倒壊したことにより、漁業と住宅の関係は徐々に薄れていったと考えられる。

#### 5. おわりに

池間島では、方位が住宅の間取り、空間構成に重要な影響を及ぼしている。また、毎日の供え物や祈りを捧げる行為、屋敷の四隅の方位が自然方位の東西南北で示されるとともに、島民にとって屋敷という居住空間が日常的な生活の場であるだけでなく、象徴的な意味を持っていると考えられる。

池間島の住宅は仏壇を中心に各部屋が構成されている。仏壇が二番座の玄関から入ってすぐのところに置いてあり、来客は住人と一緒に拝むことができる。

かつては、日常空間は二番座、非日常空間は一番座というように部屋ごとの領域は明確に分かれていた。それが現在では日常と非日常の領域が重なっている空間があり、明確に分けられていない。このように建築としての住宅は変化しなくても、住宅内の空間領域は変化していくと考えられる。

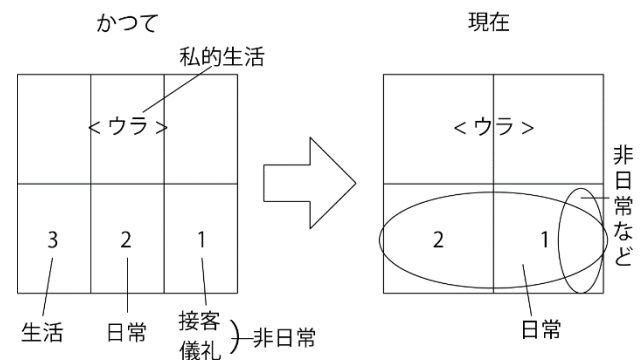


図5 住宅内の領域の変化

#### 参考文献

- 1) 野口武徳『沖縄池間島民俗誌』1972年7月 未来社
- 2) 伊良波盛男『わが池間島』2011年2月 池間郷土学研究所
- 3) 笠原政治『〈池間民族〉考 ある沖縄の島びとたちが描く文化の自画像をめぐる』2008年 風響社
- 4) 伊良波盛男『新編 池間島の地名・池間島の聖地』2010年8月 池間郷土学研究所
- 5) 鈴木正崇『南西諸島に於ける方位観の研究 - 空間認識の視点から -』1978年 人文地理学会
- 6) 鶴藤鹿忠『琉球地方の民家』1972年4月 明玄書房